
LUCKYSTARS ARE GO !

ゾダグア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LUCKY STARS ARE GO!

【Zコード】

Z5928Z

【作者名】

ゾダグア

【あらすじ】

時は2065年。

人類は既に宇宙にまで進出していった。だが、地球上ではいまだ多くの災害・事故で命が失われていった。人類で初めて月に降り立つた男　ただお『トレイシー』はその現状を憂い、私財を投げ打つて『国際救助隊』を設立した。ただおの優秀な娘たち（+彼女らの友人）によって構成された隊員は、天才こなたによって設計された『ラッキースターロケット』に乗つて地球上のあらゆる場所で起つた重大な危機に対処する。

がんばれ、
国際救助隊。
行け、ラッキースター！

(前書き)

「らき すた」キャラで「THUNDERBIRDS」を演じると
言うバカネタ。

ストーリーの流れはサンダーバードの第一話を元にしています。原作が美しい思い出となっている方や、「ファイヤーフラッシュ号は俺の嫁」など、キャラ・メカに思い入れがある方はこの作品を読むとそれらが汚されたと感じるかも知れません。また、今のご時世では“原子力”を夢のエネルギーの様に扱う訳にはいかないので、前に某画像掲示板であつたやりとりを元に「ロリータエンジン（注）」を採用しています。最後に、オチが酷いです。それでも構わない。と思われたなら、貴方の時間をこの作品に少しだけ下さい。

時は2065年。

人類は既に宇宙にまで進出していた。

だが、地球上ではいまだ多くの災害・事故で命が失われている。人類で初めて月に降り立った男　ただお“トレー・シー”はその現状を憂い、私財を投げ打つて『国際救助隊』を設立した。ただおの優秀な娘たち（+彼女らの友人）によって構成された隊員たちは、天才こなたによつて設計された『ラッキースターロケット』に乗つて地球上のあらゆる場所で起こつた重大な危機に対処する。がんばれ、国際救助隊。行け、ラッキースター！

LUCKYSTARS ARE GO!

さいたま国際空港の管制室。

空港長のななこ・キニスンは望遠鏡で滑走路の一点を見ていた。

「ファイヤーフラッシュのお披露目か……」

彼女が望遠鏡を向けている先。そこには国際線ターミナルと繋がつた鋭角的なフォルムがあつた。新型旅客機ファイヤーフラッシュ号である。今日が一般の乗客を乗せての初のフライトとあって、ロビーには報道陣と思しき姿も見える。

ななこはそのままファイヤーフラッシュ号の全体を舐めるように見舞わす。その時ふと、おかしなことに気付いた。

「まだ整備車両があるな。この時間ならとっくに終わっ取るはずなのに、どしたんやう?」

ファイアーフラッシュ号の降着装置のハッチの傍には整備車両が一台停まっている。発進まで残り5分を切っている。もうとっくに機体から離れているはずだった。

「まあ、今日が初めてやからな。念入りに確認しきつてんやう」
いつもなら不審に思うところなのだが、ななじまにいつ考えて怪しまつとしなかった。これが、大変な事態になるとは知らずに……。

『ファイアーフラッシュ号よりさじたまタワー。乗客の確認は終了した。滑走路に向かう』
「さじたまタワー」解

タラップ車を切り離したファイアーフラッシュ号が滑走路へと進んで行く。

滑走路手前で一度停止。滑走路の途中に設置された可動式信号機が赤から青になると、信号機が地面に沈んで行くのと同時にファイアーフラッシュ号は走り出した。

離陸。

こうして、腹の中に危険な物が設置されたと知らず、ファイアーフラッシュ号の飛行は始まった。

× × × × ×

「なんだか、凄い音がしましたけど……」

ファイヤーフラッシュ号の翼の部分に設けられた客席。高良みゆきは添乗員と話していた。

「「ひ安心ぐださこ。これは当機が音速を超えたことに由つて発した衝撃波によるものです。いっさい危険はござりませんよ」

先ほど生じた爆音と微妙な揺れ。

みゆきはファイヤーフラッシュ号が超音速旅客機であると言つことから、ある過程を立てて乗務員に訊ねていたのだ。そして、その仮定は正しかった。

「それを聞いて安心しました」

想像したとおりなんの問題もなく、みゆきは安心して座っていた。

× × × × ×

『面白い事を教えてやろつ。

今出発したファイヤーフラッシュ号に爆弾を仕掛けた。着陸装置のところだ。

車輪が地面に触ると、爆発する。機体はめちゃくちゃに飛び散つてしまつぞ』

「空港本部に届けられた脅迫電話を録音したテープ。十中八九いたずらだと思ったが、ななこは大事を取った。」

「管制官。すぐにファイヤーフラッシュに連絡を！」

ファイヤーフラッシュは既に既定の高度に達していて、自動操縦に切り替わっていた。すぐに機長に低速安全飛行でさいたま空港に引き返すように指示を出す。

「非常警戒態勢に入れ」

同時に空港警察や待機している消防車に連絡を取り、出動の準備を整えてもらう。

と、視界にファイヤーフラッシュの姿が見えてきた。

「望遠カメラの用意と、整備班長を呼んでくれ」

『ファイヤーフラッシュからさいたまタワー。着陸態勢に入る。どうぞ』

『さいたまタワー了解。降着機構辺りのメカニックを確認するので、タワー側から取りやすいように飛んでくれ』

ファイヤーフラッシュが管制室のあるタワーと同じ位の高さで飛んできた。

技術スタッフが即座にカメラの連続シャッター機構のスイッチを入れる。一秒間に数十枚と言つ速度でシャッターが押され、写真が撮られていく。

「確認します」

すぐさまカメラがパソコンに接続され、さつき撮った写真の確認に入る。

「ただいま参りました」

整備班長が速やかに管制室にやつてきた。

「整備班長。画面に映っているファイヤーフラッシュの着陸機構におかしなものがないか確認してくれ」

何百枚と撮影した写真の中から絞られた20枚ほどを画面上で確認していると、班長は驚きの声を上げた。

「これは……ファイヤーフラッシュの部品じゃない！」

班長が指さす先には胴体部に内蔵された着陸脚、そのフレームの部分に取り付けられた赤い筒だ。

「“Bomb”って、書いてある……」

「いくらあやしいものだろうと、異物が取り付けられていたのは確かだ。

「ファイヤーフラッシュ、こちらこそたまタワー。高度一万メートルでさいたま付近を飛び続ける」

『了解です。しかしこうねえ、ずっと飛び続けると言つても、ロリータエンジンのカバーは2時間30分以内に取り換えない、乗客が脳を侵されてしまふんですよ』

機長の言つ事はもつともだつたが、それ以外に今のところの対策の取りようがない。

ななこは空港幹部を招集した。

× × × × ×

スペースステーブリに覆われた地球の周回軌道上。そこに世界でも一部の者しか知らない宇宙ステーションがあつた。

『 いちらフアイヤーフラッシュ。高度1万メートルで旋回中。ロリコンが脳を侵すまで、あと、2時間。これでは、奇跡でも起こらなければきりません』

管制塔とファイヤーフラッシュの間の通信。暗号化された電波でやりとりされていたはずのそれが、ここでは普通に流れていた。何かの組織の制服だろうか？

未来的なデザインの青い服を着た女性が計器の前にいる。

「その奇跡を起こしてあげる」

女性はまっすぐと笑みを浮かべた。

× × × × ×

所変わつて、太平洋上にあるトレーシー島。ただお・トレーシーと彼の家族が住む島である。島中央部にあるトレーシー邸ではちょうどただおが音声入力式のタイプライターを使って何か文章を作っていた。

「国際救助隊員はラッキースターロケットの秘密を他に漏らしてはならない。間違つて使えば、人類を滅ぼす武器と……」

電子音が鳴つた。

ただおは入力を止め、壁に掛けられた彼の娘たちの肖像写真に視線をやる。一番右端の次女まつりの目が光つている。机に設けられたスイッチを押し、スピーカーを展開する。

「なんだね？」

瞬間、まつりの肖像画がモニターに変わり、宇宙ステーションにいるまつり本人が映つた。

『おとうさん。私達の初仕事です。ロリータ旅客機ファイヤーフラッシュに爆弾を仕掛けたと言う情報が入りました』

『ファイヤーフラッシュ……みゆきが乗つていてる飛行機だ』

ただおの娘たちの友人、高良みゆきが乗つていてる飛行機が確かそ
れだ。

「みんな、至急指令室に集まつてくれ」

館内放送で家族を集める。

広い家だと、こちこち呼びに行くのも骨なのだ。

「どうしたの、おとうさん」

「“司令室”ってことね、初出動?」

まず、三女のかがみと四女のつかさがやってきた。
「みんなが集まつてから話すから、一旦座りなさい」
「はあーい」

かがみとつかさはソファに並んで腰を下ろした。

「ちわー。整備はバツチシおくですー。」

メカニックの天才でかがみたちの友人であるこなた・ブレインズ
が次に現れた。

「ちょ、こなた。もう少し言葉つかいつてもんを……」

かがみがこなたを注意しようとする。しかし、ただおはそれを遮
つた。

「いや、良いんだかがみ。

ブレインズ、ご苦労。ちょいどいいタイミングだ」

こなたはその頭の回転の速さから言葉が追いつかず、使いなれた
ネットスラングやオタク用語が出てしまう。今回は締めが敬語っぽ
かつたので、まだマシな方だった。

「遅れてゴメンー!」

最後に長女のいのりがやって来て、かがみたちの座るソファの後ろに立った。

「うそ。みんな揃つたな。それでは、説明するぞ。さいたま空港発の新型旅客機ファイヤーフラッシュに爆弾が仕掛けられていることが判明した」

と、かがみとつかさの顔が蒼白になる。

「お父さん。ファイヤーフラッシュって、たしか……」

「ああ、みゆきが乗つている飛行機だ」

かがみとつかさは立ち上がるつとしが、上からいのりによつて押えられた。

「ちょっと、お姉ちゃん」

「お父さんの話はまだ終わつてないよ？ それにむつ少し落ち着きなさい。現場であせつたら助かる命も助からなくなつちやうんだからね」

何かに気付いたように驚くかがみたち。

ただおは話を続けた。

「今回は初出動にして身内が乗つていると言つ事態だ。焦るなよ。仕事の時に着る制服はそれぞれの機に備えてある」

「わかりました」

「のりが、

「よつし。みゅき、待つてなさい」

かがみが、

「みんな、がんばりつー。」

つかさが、それぞれ意氣込む。

ただおは娘たちの様子を見て微笑む。そして司令を告げた。

「よつしのり、行きたまえ。かがみは後だ」

壁側に向かつて行ぐいのりと、席を立つたかがみを見送り、ただおはこなたに話しかけた。

「ブレインズ、ラッキースターロケットはお前が作ったものだ。どんな働きをするか楽しみだな」

× × × × ×

1号の搭乗エリアに入つて行つたのりを見送ると、かがみは司令室の壁に掛けられたロケットの写真パネルに向かつ。これは父が乗つて月に降り立つた時のロケットらしい。

パネルに背中をくつづけるよつにもたれかかると、それはかがみの足を上にするように持ち上がつた。頭を下にする形でかがみの体はパネルから下にあるソリに落ちて行く。ソリはかがみの体の勢い

を受け、そのまま数メートルほど降りた。やがて角度がない回転工リアで横回転することで上下を逆にして、かがみは再び降りて行った。

長い長いスロープを下つて行くと、開けた場所が見える。そしてソリが止まり体はその下にあるスロープの最下段に降ちた。ラックスター2号のコクピットへの到着である。

かがみにとつてここが鬼門だ。めぐれあがつてしまいそうになるスカートを抑えつつ、足がタラップに着く。ゆっくりとパイロットシートが可動する間に何とか乱れを直し、機体の起動スイッチを入れる。かがみの方にせり出してくる操縦桿。そしてコクピットの床の一部が持ち上がりラックにかけられた制服及び装備類が現れた。

「コンテナは3番を選択。乗せるのは高速エレベーターか……」

制服に着替えつつ機体の状態を示すモーターを見る。なんとか本部からのコンテナ選択が終わる前に着替え終え、再びシートに座る。

「着陸脚を下げます」

機体の真下でコンテナの移動が止まったのを確認すると、かがみは伸縮式の着陸脚を縮めるスイッチを入れた。ゆっくりと下降していく機体。

「ロック作動」

完全に地面と同じ高さになつたことが計器に示される。かがみは機体とコンテナを接続する電磁式のロックのスイッチを入れた。

目の前では格納庫の扉が徐々に外側に倒れて行く様子が見える。機体を滑走路に進ませる。消化装置を備えた偽装ヤシの木が倒れて行く。

「よし、一時停止……と」

滑走路の途中で機体を停止。すると視界と体が徐々に斜め上を見る形になつて行く。発進装置の作動だ。

「ラッキースター2号、発進」

メインエンジンのスイッチを入れる。

空に向かつて行く機体。ラッキースター2号の発進だ。

× × × × ×

『ファイヤーフラッシュよりさいたまタワー。救助作業は失敗。怒ど
璃瑠2尉はパラシユートで降下。ロリコン汚染まで、あと30分しか
かありません。どうぞ』

自衛隊に協力を仰いでの爆弾の撤去作業は失敗に終わった。まあ、飛んでいる飛行機の整備ハッチ内に一時的にとは言え入つて爆弾を確認できただけすごいのだが……。

作業の失敗を見越して、管制室ではすでに行動を起こしていた。

「こうなつたら最後の手段だ。付近の人は全員避難したから、思い切つて着陸させてみよう。胴体着陸してみて、天の助けで爆弾が爆発しないことを祈るしか……」

最後の手段として、ファイヤーフラッシュ号を胴体着陸させる」とを決めたななこ空港長。

と、その時レーダーを見ていた管制官が慌てた様子で報告してきた。

「東から飛行体が接近。高度825メートル。速度、あの……時速何と12000キロです！」

赤い髪の部下（確か、マクドゥガルとか言つた前）の報告に呆れるななこ。

「時速12000キロだと！？ 気でも狂つたのか」

極度の緊張で部下の精神がまいってしまったのだろう。

『「J-1414141414」キースター1号よりさいたまタワー。現在空港に接近中。高度、825メートル。速度時速12000キロ。後2分で着陸します』

無線機からの声を聞き、ななこはレーダーの下に向かう。自分の気も狂つたと思った。

『さいたまタワー。こちら国際救助隊。ファイヤーフラッシュ号の救助の手伝いに来ました。着陸許可を求めます』

「国際救助隊？ 聞いたことがないな。」

国際救助隊へ。着陸許可を出す。滑走路は、29番

国際救助隊だとか、聞き覚えがない名前だ。胡散臭いとはおもいながらも、しかし今は藁にもすがりたい。着陸許可を出す。

『あ、滑走路はいりません。垂直着陸しますんで』

×××××

ラツキースター1号に続く形で発進した2号。かがみはその操縦桿を握り、先行した姉いのりからの連絡を今か今かと待ちわびていた。

『ラツキースター2号、いちいち移動司令室。さいたま到着まであと何分何秒?』

姉の質問に計器とナビゲーション見て、暗算で答える。

「OKお姉ちゃん。あと19分30秒で着く」

『了解。着いたらすぐに高速エレベーターを3台用意して。29番滑走路の端に運んだら、知らせて』

どうやら空港当局の協力を無事に得られたらしく。

『ラツキースター2号、了解』

そういってこる内に、空港が見えてきた。

「ええと、29番は……あつた」

指定された滑走路に2号を垂直着陸せると、かがみはコンテナ内部に移動した。予備を含めた4台の高速エレベーター車がそこに積まれていた。かがみはコンテナ内部にあるハッチの開閉スイッチを入れる。

外では2号がコンテナとの電磁ロックを外し、伸縮式の着陸脚を伸ばしているところだろう。今の内に『MASTER ELEVATOR CAR』と書かれた一台に乗り込む。

ハッチが開いた。スロープを兼ねたハッチの上に車体を進ませる。まずは自分の、そして2台の無線誘導車両オブショーンが出ていく。

滑走路上で三角形を描くように3台を並ばせると、姉からの連絡がきた。

『移動司令室からラッキースター2号。用意はいいか?』

『移動司令室とファイヤーフラッシュ。』
『こちらラッキースター2号。準備完了!』

『司令室よりラッキースター2号、了解』

通信機からは姉の声以外に焦る声や、怒号が聞こえてくる。管制室はきっと緊張した雰囲気に包まれているのだろう。

『いい、かがみ。いよいよファイヤーフラッシュが入つて来るわよ。現在2キロに接近……1.5キロ……1キロ……作業開始!』

『こちら2号、了解』

こちらからはファイヤーフラッシュ号の様子をうかがう事が出来ない。姉のアナウンスに従い、エレベーター車を発進させた。

『108に增速』

『了解』

後方モニターにファイヤーフラッシュ号の姿が見えてきた。あつという間に追いつかれる。

かがみは自分の乗る1号車を胴体の、2号と3号車を左右の翼の下に誘導した。

「ファイヤーフラッシュ号。エンジン停止」

エンジンを切ったファイヤーフラッシュ号がエレベーターカーの上に降りてくる。

衝撃。

1号と2号は上手く行ったが、左翼を担当する3号は上手く乗らない。

「ファイヤーフラッシュ号、左を上げて！ 左翼を上げるのー。」

ファイヤーフラッシュ号が再びエンジンに火を入れ、左翼を持ち上げる。

3号車の速度を上げ、2回目で上手く乗った。

「よし、逆噴射開始

ファイヤーフラッシュ号は逆噴射用のエンジンを点火。

「いっともブレーキをかける」

ゴムが路面で削れる凄まじい音。同時に車内も熱されて辛い。

『このままではダメだ！ 滑走路から飛び出してしまあつー。』

ファイヤーフラッシュ号から警告。メーターを見ると減速はでき

てこるようだが、まだ足りないらしい。

「落ち着いて。全制動をかける」

ブレーキから一転、ギアをRに入れて制動をかける。凄まじい負荷に車体が悲鳴を上げている。

破裂音。

自分の乗っている車の制御が効かなくなってしまった。なんとか停止させようとするが上手く行かず、ファイヤーフラッシュ号の下から弾かれてしまった。

「ほんのうつ！」

最後のあがきで滑走路に叩きつけられた機首に車体をぶつけ、進行方向を変えてやる。その反動で1号車は完全に滑走路から外れてしまつ。

「うわあつ！」

上下が入れ替わる。

ファイヤーフラッシュは、みゆきはどうなつたのー。モニターが割れてしまい、状況が分からなくなる。

『大丈夫、かがみ？』

移動司令室の姉からの連絡。

『「」ちは大丈夫。ファイヤーフラッシュは？』

『もう大丈夫よ。今空港の消防隊が向かつた』

消防車や救急車のサイレンの音が聞こえてくる。

ああ、よかつた。

かがみはほつと、胸を撫で下ろして上下逆の現状からの脱出を図ることにした。

左腕で頭を抱えるようにしながら、シートベルトを外す。

「あいたたたたたた…………」

天井＝床に落ちる。

一瞬痛みが走るが、それよりも安堵が大きかった。

× × × × × ×

「……と、言つ夢を見たんだよ」

休日の柊家の食卓。寝坊した末女のつかさは言った。いきなり何いつてるんだ、この子は。

つかさのすぐ上の姉である3女のかがみは呆れながら、昨日の事を思い出して言った。

「昨日テレビで映画を見たから？」

実は昨日、地上波で「THUNDERBIRDS ARE GO！」が放映されていたのを、家族で見ていたのだ。

「たぶんそう」

つかその返事に、かがみは溜息を吐いた。

終わり

(後書き)

らき すたで何かSUAを書いつと考へていたら、ふと思いついた
ネタ。

「作者は何歳だ?」そう思つ方がいると考へて先に書つておきます
が、平成BOYです。92年に放映された再放送を親が録画してお
いてくれた物を、何度も見て好きになつたクチです。

さて、内容はTHUNDERBIRDSの一話を改悪してらき
すたキャラを突つ込んだものです。終家をそのままトレー・シーフア
ミリーにあてはめたのですが、いつそ「かがー・ジル」とか、「つか
ドン」などの名前にしようか迷つた末、妥協して今の形になりまし
た。「ただエフ」なんて、発音できませんしね。こなた"ブレイン
ズなのは、頭の回転が速すぎて言葉が追いつかなくて吃音」と書つ
設定をみゆきでは使い難いと思つてのものです。

さて、私が受けとつた電波によるこの小説を読むのに時間を使つ
ていただき、ありがとうございました。私の芸風がお気に召しまし
たら、どうか次の作品もよろしくお願ひします。

(注)ロリータエンジンは「萌え連」であつたやり取りで上がつた
物を使つています。ログが一度落ちてしまつたので詳しい日時は分
かりませんが、私のアイディアではないので、原文とともにここに
書いておきます。もしあのやり取りをしていた方が読んでいたなら、
ここでお礼を言わせてもらいます。ありがとうございました。

「ロリータエンジン：ロリを原動力としてエネルギーを生み出す機
関。

俺達、もしくはお前らが单一、または複数搭載されている場合があ
る。(気筒数は人数構成)

原動力のロリは2次元と3次元の場合がある。場合によつては両方
の使用が可能であるが、基本的にはどちらか一方に対応する正しい

燃料を使用しなければ趣向の違いによる反発^{ノックキング}が発生し、燃費や性能の低下に繋がる。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5928n/>

LUCKYSTARS ARE GO !

2010年10月13日07時21分発行